

ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界

芝右衛門狸

洲本にひびく腹つづみ

およし狐

狩人と暮らしたお相手は

伝説

芝右衛門狸

洲本にひびく腹つづみ

およし狐

狩人と暮らしたお相手は

紀行

狸と狐

- ・洲本八狸
- ・狐に化かされる
- ・県域の狐話

関連情報

用語解説

参考書籍

所在地リスト

伝説

芝右衛門狸 洲本にひびく腹つづみ

淡路島（あわじしま）の洲本（すもと）の町の南に、三熊山（みくまやま）という山があります。この山には芝右衛門（しばえもん）と呼ばれる狸（たぬき）が住んでいました。よく晴れた月の夜などには、「ぼんぼこぼん。」と陽気な腹つづみの音がひびき渡り、洲本の人たちにも親しまれていました。

芝右衛門狸には、親友の狸がいました。名を阿波の禿げ狸（あわのはげだぬき）といい、よく芝右衛門狸と化けくらべをして遊んでいました。ある日、いつものように化けくらべをすることになり、芝右衛門狸が、街道を行く大名行列（だいまょうぎょうれつ）に化けることにしました。

「下あーにいー。下あーに。」

阿波の禿げ狸が木の上で見物していると、たくさんのお供衆を連れた立派な行列がやってきました。阿波の禿げ狸は感心して、木の上から、「いやー、立派なもんやなあ。本物そっくりや。」と手をたいて大声でほめてあげました。

しかし、そのとき。

「無礼者！」

と、行列の先頭の侍（さむらい）が刀を抜き、阿波の禿げ狸を木からひきずりおろし、一刀のもとに切りすててしまいました。阿波の禿げ狸が見たのは本物の大名行列だったのです。芝右衛門狸は、自分が変なものに化けると言ったせいで親友を失ってしまったと、深く悲しみました。

それからしばらくして、芝右衛門狸はふと思いたって、大坂（おおさか）の芝居（しばい）を見に行くことにしました。芝右衛門狸は芝居見物が大好きでした。

「やっぱり芝居は大坂が本場や。一度じっくりと本場の芝居を楽しんでみたいな。」

芝右衛門狸はお侍の姿に化けると、船に乗って一路大坂へと向かいました。大坂の芝居小屋はさすがにぎやか、役者の芝居もすばらしいものでした。すっかりとりこになってしまった芝右衛門狸は、洲本へ帰ることも忘れて、毎日毎日、芝居小屋に通いました。

でも、窓口ではらう銭は、木の葉を化かしたものです。芝居小屋の人たちは、このところ毎日銭の中に木の葉がまざっているので、「これは狐（きつね）か狸のしわざに違いない。」と腹を立て、銭を受け取る窓口の下に犬をひそませることにしました。

伝説

芝右衛門狸 洲本にひびく腹つづみ

次の日、芝右衛門狸はいつものように心を浮き立たせながら小屋にやってきました。ところが、窓口で銭を払おうとしたとき、下から犬がものすごい勢いでほえかかってきたのです。化け上手の芝右衛門狸でしたが、こうだしぬけに苦手の犬にほえられてはたまりません。ぽろり、とふさふさしたまん丸いしっぽが出てしまいました。

「おのれ、おまえが悪狸やな。」

小屋の人たちは芝右衛門狸をさんざんに棒でたたきのめしました。いつもかわいがってくれている洲本の人たちならば、笑って許してくれたのですが、ここは遠くはなれた大坂。そういうわけにはいきませんでした。芝右衛門狸の意識は、だんだん遠くなっていきました。

それからしばらくして、洲本の町にも、「大坂で芝居見物に来ていた狸が殺されたらしい。」とうわさが流れてきました。「このところ三熊山から腹つづみが聞こえてこないな」、と思っていた人たちは、このうわさですべてをさとりました。洲本の人々は心から悲しんで、三熊山に祠（ほこら）を建て、ねんごろにとむらってあげたということです。

(『郷土の民話』淡路編、『兵庫の伝説』第一集をもとに作成)

伝説

およし狐 狩人と暮らしたお相手は

むかしむかし、姫路（ひめじ）の近くに住んでいた狩人（かりゅうど）が山へ出かけると、一匹の狐（きつね）が大蛇（だいじゃ）にしめ殺されそうになっているところに出くわしました。かわいそうに思った狩人は、鉄砲（てっぽう）で大蛇を追いはらい、狐を助けてあげました。

その帰り道、林の中を歩いていると、突然目の前の木から女の人が落ちてきました。見上げると枝に縄（なわ）がかけられていて、どうやら首をつろうとして失敗したようです。

「ばかなことをするな。どうしてこんなことをするのや。」

女の人を助けおこしながら狩人は聞きました。

「どうか見逃してください。私、どうしても死ななくてはならないのです。」

「どうしてや。わけを話してはくれないか。」

「私は、父が亡くなり、継母（ままは）や義理の妹と暮らしているのですが、どうしても死ななくてはならないわけがあるのです。どうか死なせてください。」

「うーん。それはきっとよくよくのわけがあるのやな。でも、死ぬなんてつまらないことを考えるものやない。どうや、今すぐ家に帰れないのなら、しばらくわしの家において、そのうち様子がよくなったら帰っては。」

やさしい狩人の言葉を聞いて、女の人もおあとをついて行くことにしました。

狩人の家へ来た女の方は、よく働きました。狩人もいろいろと助かるので、つつい帰すことを忘れて、しばらく一緒に暮らしていました。

しかも、女の方が来てからというもの、狩人が山へ行こうとすると、女の方が、「今日は西の山がいいですよ。東は獲物（えもの）がありません。」などと教えてくれます。狩人がそのとおりにすると、いつもたくさんの獲物がとれました。

暮らし向きも豊かになってきた狩人は大喜びで、だんだんその女の人を妻にむかえたいと思うようになりました。でも、直接言い出す勇気がないので、友達に頼んで女の方の気持ちを聞いてもらうことにしました。

ところが、気持ちを聞かれた女の方は、悲しそうな顔をして、「あの人のためにならないから、あきらめてほしい。」と言います。でも、狩人はあきらめることなどできないので、勇気を出して直接熱心に頼みました。すると女の方も、しぶしぶ承知しました。

伝説

およし狐 狩人と暮らしたお相手は

いよいよ結婚式をあげる段取りをすることになりました。暮らしも豊かになっていたので、できるだけ盛大にしたいと狩人がはりきっていると、女の人が、「お金は私の方で全部持ちますから。」と言います。狩人は、「おかしなことを。」と思いましたが、とりあえず言うとおりにまかせてみました。すると、どこからともなく大勢の人々がやってきて、たくさんの嫁入り道具から、山のような料理まですべてそろえて運びこんできました。

とうとう婚礼の日になりました。花嫁は、綿帽子（わたぼうし）を深くかぶって席に座り、結婚式が行われました。ところが翌朝、花嫁の顔を見た狩人はおどろきました。花嫁は別人なのです。

「あなた、どうしてここにいるのですか。」

「わたしも、……、よくわからないのです……。」

「あなたはどこのどなたです。」

「私は、となり村の庄屋（しょうや）の娘です。」

「ええっ！ あの大きなお宅のおじょうさんですか。」

狩人はわけがわかりません。でも気をとりなおして、

「どういうわけなのやろう。あなたの知っていることを教えてください。」

「はい。実は、私は親が決めた人のところへおよめに行くことになっていたのですが、どうしてもいやだったのです。それで毎日泣き暮らしていたのですが、昨日の朝、どこからか女の方がやってきて、『私の言うとおりにしなさい。そうすればあなたは幸せになれるですよ。』と言われます。知らない人だったのですけれど、私はわらにもすがるような気持ちでしたし、それにとてもよさそうな方だったので、私、言われるとおりにしようって決めたのです。そしたら、それから気分が何だかぼんやりしてきて、ふと気がついたらこちらの婚礼の席に座っていたのです。」

狩人はますますわからなくなって、ぼかんと口を開けて座りこんでしまいました。すると、縁側の障子（しょうじ）に一匹の狐の影が大きく映りました。狩人が驚いて目を見開くと、その狐の影がぴよこん、とおじぎをしました。

「あ！ これでわかった。」

狩人がさけぶと同時に、すーっと障子が開いて、昨日までいた女の人が姿を見せました。

「あ、私がお会いしたのもこの方です！」

花嫁もさげびました。

二人の声を聞いた女の方は、にっこりとほほえんで、またもとの狐の姿に戻りました。そして、そのままどこへともなく姿を消してしまいました。

その後狩人夫婦は、花嫁の両親の許しもえて、幸せに暮らしたということです。二人を結んだ狐の名は、「およし狐」と伝えられています。

（『郷土の民話』中播編をもとに作成）

紀行 狸と狐

洲本八狸

淡路島（あわじしま）の洲本（すもと）の町を見守るように、背後にそびえる三熊山（みくまやま）。この山に住むという狸が芝右衛門狸（しばえもんだぬき）である。芝右衛門狸は、佐渡島（さどがしま = 現在の新潟県佐渡市）の団三郎狸（だんざぶろうだぬき）、讃岐国屋島（さぬきのくにやしま = 現在の香川県高松市）の禿狸（はげだぬき）とならんで、日本三名狸にあげられる有名な狸だ。なお、「芝右衛門狸」は「柴右衛門狸」とも表記されるが、ここでは古い文献の表記を尊重して、「芝右衛門狸」で統一したい。



三熊山から見た洲本市街



洲本市街から見た三熊山

三熊山の山頂部には、中世の安宅（あたぎ、「あたか」とも言う）氏の城に由来するとされる洲本城がある。現在は、江戸時代はじめに脇坂安治（わきざかやすはる）が築いた石垣が残る。大坂夏の陣以降、淡路国は蜂須賀（はちすか）氏の阿波国（あわのくに = 現在の徳島県）徳島藩領となり、寛永12（1635）年から重臣の稲田（いなだ）氏が城代として洲本に入る。しかし、稲田氏時代の洲本城は山麓部に築かれたもので、三熊山の山頂部は使われていなかった。現在は、1928（昭和3）年に昭和天皇即位式に合わせて建設された模擬天守閣が、町を見下ろしている。



洲本城



三熊山の芝右衛門狸の祠



道頓堀角芝居（『浪華の賑い』）

主郭跡の片隅には、芝右衛門狸をまつる祠（ほこら）があり、中には狸像がまつられている。これは1962（昭和37）年に片岡仁左衛門（かたおかにながえもん）、藤山寛美（ふじやまかんび）といった、大阪の芸能人たちが寄進したものである。今は解体された道頓堀中座（どうとんぼりなかざ）にも、「おたぬきさん」と呼ばれる芝右衛門狸をまつる祠があった。大阪の芸能人たちにも、芝右衛門狸の話は親しまれていたのである。

近年、洲本ではこの狸伝説を生かした町おこしに取り組んでいる。きっかけは1999（平成11）年の大阪中座の閉館で、そこにまつられていた芝右衛門狸が洲本に帰ってくる話もちあがったことにあった。今では芝右衛門狸をはじめとする8つの狸の石像が街の各所に建てられ、八狸（やだぬき）マップも作られて、狸を訪ねながら街を散策できる。8つの狸の話は、『洲本八だぬきものがたり』（2002年、アリス館）として刊行されているので、これにもとづいてそれぞれ紹介していこう。



芝右衛門(柴右衛門)狸



芝右衛門狸の社



洲本八幡神社

まず、芝右衛門狸は、洲本八幡神社の境内にいる。石像の背後には、大阪中座から洲本に帰ってきた芝右衛門狸をまつる社殿もある。社殿の前にある舞台には、「大阪中座 お狸さん」という額がかけられている。神社のお話では、大阪中座から芝右衛門狸が帰ってきたときに、もともとあった舞台の後ろに、新しく社殿を建設したものだという。



柴助狸

芝右衛門狸の息子が「いたずらだぬきの柴助（しばすけ）」で、洲本八幡神社の門前の足湯の脇にある池の中に立っている。子供のころは芝右衛門に教えてもらった化ける術で街の人にいたずらばかりしていたが、あるとき思い立って北前船（きたまえぶね）に乗り込んで蝦夷地（えぞち = 現在の北海道）まで大冒険に行ってきたのはしっかりしてきたようだ。途中の越後国柏崎（えちごのくにかしわざき = 現在の新潟県柏崎市）の港で見た花火大会が忘れられず、洲本へ帰ってからは仲間を集めて花火に化けては町の人を楽しませたという。



武左衛門狸

八幡神社から西へ、巖島神社の境内にいるのが「夜まわりだぬきの武左衛門（ぶざえもん）」である。町の武家屋敷の人たちが戸締まり、火の用心をしないことを見かねて、毎晩役人に化けて見回りをしていたという。



お増狸

さらに商店街のアーケードの中には「買いものだぬきのお増（おます）」がいる。お増狸は芝右衛門狸の妻で、芝居見物にうつつをぬかす芝右衛門狸の留守をまもって子育てをした、しっかりものの狸だ。お増狸は街に出て買い物をするのを楽しみにしていたが、払うお金はやはり晩になると木の葉になってしまうものだった。でも、なぜかお増狸が来た店はそのあと商売繁盛するようになるので、街の人たちにはとても人気があったという。



川太郎狸

アーケードの西の端、千草川（ちくさがわ）の橋のたもと近くには「河守りたぬきの川太郎（がたろう）」がいる。一家みんなが川太郎という名前で、人間の姿に化けては川の掃除をしたり土手を直したり、あるいは川で仕事をする街の人たちを助けたりする狸とされている。



宅左衛門狸

川太郎狸がいるところから、寺町筋（てらまちすじ）を北へ行き、城下町の西北の出口にあたる洲本川沿いにたたずむのが「頼母子講（たのもしこう）だぬきの宅左衛門（たくざえもん）」である。洲本狸の長老で、たくさんの蓄えを持っていて、困った狸があると分け与えて助けてあげたという。また、みんなで少しずつ蓄えを出し合って、くじで当たった人に順番に融通しあう頼母子講というしくみをはじめた狸ともされている。



お松狸

洲本川沿いには、紡績工場（ぼうせきこうじょう）の煉瓦建築（れんがけんちく）を活用した、商業施設や市立図書館がある。ここに、「美人だぬきのお松」がいる。芝右衛門狸の娘で、洲本で評判の器量よし、結婚を申し込む狸はたくさんいた。いったん阿那賀（あなが）の与茂太夫狸（よもだゆうだぬき）の熱心な求婚にほだされて嫁入りしたが、遊び人の与茂太夫狸はすぐに家をあけてしまうようになったので別れ、最後は台場の伊助狸（いすけだぬき）と結ばれて幸せに暮らした、という。



榎右衛門狸

最後に、市役所近くの堀端筋（ほりばたすじ）の交差点の隅に「大入道（おおにゆうどう）だぬきの榎右衛門（ますえもん）」がいる。この像、何をかたどっているのか、一目ではよくわからない。なまけものの狸で、いつも昼間からお酒を飲んで寝てばかりいたという。この像は、どうやら丸いおなかの上にお酒を飲むおちょこを乗せて寝転がっているところのようだ。ただし、榎右衛門狸はいつもごろごろしてばかりいたわけではない。小僧さんに化けて、夜になって帰り道に困っている老人の道案内をしたり、悪い男にいやがらせを受けている娘さんを大入道に化けて助けてあげたりした、という。

この芝右衛門狸の話、最近洲本の人々によってリライトされた絵本（『しばえもん』、2000年、淡國書房）もある。この絵本では、中座で芝右衛門狸が犬に殺されるという筋は避けられ、また洲本に戻って穏やかに暮らすように改変されている。洲本を訪れた日、編集にたずさわった書店主のお話をうかがうことができたが、執筆者の間で、子供向けの話なのにかわいそうすぎる、ということで、あえて平成の芝右衛門狸を書こうということで改変したのだそうだ。

伝説は時代によって少しずつ変わっていくが、このエピソードは今まさに変わろうとしている姿を示しているのだろう。ほかの伝説にもみられるように、昔話や伝説には、人が死んだり不幸になったりという悲しい話がよく出てくる。かつてはそのことに意味が見出されていたはずなのだが、今日の目から見ると、もっと楽しく幸せな話の方が受け入れやすいのだろう。

実際、芝右衛門狸の話は歴史の中で大きく変容してきたようだ。古くは、天保12(1841)年の『絵本百物語(えほんひゃくものがたり)』にすでに見える。ただし、そこでは洲本で芝居を見に行つて犬に殺されたという話で、大坂まで出ていく話にはなっていない。中座の話は、大坂で独自に発展したものが、明治以降に洲本に持ち込まれたとも考えられている。

また、1922(大正11)年に公表された論文では、このサイトで紹介している芝右衛門狸と阿波の禿狸の化けくらべの話は、京都伏見で土地の狐と化けくらべをして、芝右衛門狸が大名行列を勘違いして殺された、という話で載せられている。

狐と狸の化けくらべの話は佐渡の団三郎狸にも見られ、こちらの方が古い形と見てよい。なお、阿波の禿狸とは、日本三名狸にあげられている、隣の讃岐国屋島の禿狸のことと考えられる。どこかで両者が結び付けられるようになったのであろう。

さらに、柴助狸やお増狸など、芝右衛門狸以外の狸についても、幕末以降に語られはじめたと見られている。たしかに、紹介した8つの狸のキャラクターはいずれも親しみやすく、とても新しい印象を受ける。

いずれにせよ、洲本には狸にまつわる話が数多く伝えられてきた。これは四国の特徴と重なるもので、四国にも多くの狸伝説が残されている。淡路島は、現在は兵庫県に含まれているが、古代では四国や紀伊国(きいのくに=現在の和歌山県)と同じ南海道(なんかいどう)の一つとされたように、歴史的には四国や紀伊とのつながりが深かったのである。俗に「四国に狐なし」と言われ、四国では狐伝説はほとんどなく、その位置を狸の伝説が占めている。洲本の狸話には、こうした地域性がよく表れている。

狐に化かされる

姫路に伝わる「およし狐」伝説。この話は人に助けられた狐が恩返しとして人の妻となる「狐女房」型の話と言えるが、一般的な狐女房の話は、狐が人の妻となるものの正体を見破られて去っていく、という話が多い。この伝説の「およし狐」は嫁入りを避けて、人間に幸せな結末をもたらしている。こうした筋立ては、一般的な狐女房話よりは新しい時期のものと考えてよいだろう。

ただし、「およし狐」の名前自体は中世末期の文献までさかのぼることができる。天正4(1576)年の奥書がある『播磨府中めぐり』で「椰寺(なぎでら)の小よし狐」と記されていて、少なくともこのころから、姫路で語られ続けてきたことがうかがえる。

寛延3(1750)年の『播州府中めぐり拾遺(しゅうい)』では、椰寺の柱が動くことがあり、これをおよし狐の仕業と伝えている。椰寺は、姫路城下町建設以前には姫山近くの椰本(なぎもと)というところにあった寺で、現在は市内の坂田町(さかたまち)にある善導寺(ぜんどうじ)の前身とされている。



狸(『怪物画本』、個人蔵)



狐(『北斎漫画』)

天正4(1576)年の奥書がある『播州故事考(ばんしゅうこじこう)』では、永正10(1513)年のこととして、柳寺にまったく同じ服装をした二人の女性が参詣し、寺僧が不思議と見て見ていると、近くの泉のあたりで一人は消えてしまい、「柳寺の狐」の仕業とされたという。

柱を動かしたり、参詣の女性に化けたり、ここに見える「およし狐」は、一般的な狐の怪異話になっている。おそらくこのほかに、さまざまな怪異がおよし狐の仕業とされていたのだろう。

また江戸時代以来、およし狐は、紀行文「姫山の地主神」で紹介した姫路城天守閣のおさかべ姫と結びつけられることもあった。寛延3(1750)年の『播州雄徳山八幡宮縁起(ばんしゅうゆうとくさんはちまんぐうえんぎ)』では、「柳寺のおよし狐は女に化けて活動したことが諸書に見える」とし、「ここからおさかべ姫と混同されるようになったのであろう」と述べている。江戸時代の知識人の間でも、両者は本来別物で、後から結びついたものと見られていた。



久長門跡



久長門北側の中堀

およし狐がいた柳本には、中世までは柳寺とともに播磨総社(はりまそうしゃ)もあった。柳本の場所は、近世の諸書では一致して、城下町の久長門(きゅうちょうもん)の内側にある岐阜町(ぎふまち)あたりとされている。現在の場所にあてはめると、国立病院機構姫路医療センターや県立姫路東高校の付近になる。当館のすぐ東側である。



かつての柳本付近
(県立姫路東高校と国立病院
機構姫路医療センターの間)



国立病院機構姫路医療センター



総社

さて、およし狐のほかにも、姫路周辺には狐話が多数あった。『播磨府中めぐり』では、「宿村の小六」の話があり、天正3(1575)年の『近村めぐり一歩記』では蒲田(かまた)の「井内源二郎」、才(さい)の「竹次郎」のほか、「福吉狐」、「山本村の鼠狐」、「朝日山大法主の狐」、「又鶴の半まだら狐」、「利生のおしも狐」、「神村の太郎太夫狐」、「管長狐」、「黒岡山のはら斑狐」など多数の狐の名前があげられている。また、天正元(1573)年の成立と伝える『播陽うつつ物語』では、名古屋(なごやま)の「万太郎狐」、「黒天狗」、「翠髪」、「釣狐」に化かされた話がある。

こうした狐話の多さは、姫路に限ったことではない。中世末期から江戸時代にかけて、狐の話は全国各地で数多く語られるようになっていた。量的に見れば、狐は江戸時代の妖怪の主要級である。

県域の狐話

そのほかの県域でも、狐話は無数と言ってよいほどあるので、いくつか紹介しておこう。但馬の養父市（やぶし）、旧山陰道（きゅうさんいんどう）が通る八木川（やぎがわ）のほとりに、八木と三宅（みやけ）という地区がある。両地区の境には、かつて「琴引きの松右衛門（まつえもん）」や「みみんどうの小女郎（こじょうろ）」という狐が出るという話があった。

あるとき、日暮れ時に八鹿から帰ろうとこのあたりを通りかかった別のおじいさんが化かされ、いつまでたっても八木と和土（わつち、三宅の少し西側）の間を行ったり来たりさせられ、気がついたら夜が明けていたという話がある。また、あるときは畑仕事をしているうちに日が暮れてしまっただけで帰ろうとしたおじいさんが、村中の家に火がついているまぼろしを見たともいう。



しん板ばかされ尽
(個人蔵)



泉 八幡神社



八木川
(八木と三宅の境界付近)



琴引峠



泉の集落

つぎに丹波篠山（たんばささやま）の狐話。篠山市泉（いずみ）の八幡神社には、明治の神仏分離まで竜泉寺（りゅうせんじ）という寺院もあった。この裏山には、尾の先が白い狐が住んでいたというが、とくに悪いこともしないので村では折にふれてお供えなどをしておまつりしていた。

あるとき、この竜泉寺が火事で焼けてしまい、再建をどうしようかと村の人々は悩んでいた。ちょうどそのとき、少し離れた小枕村（こまくらむら）ではお寺を建て替え、古い材木の置き場に困っていた。そこへ泉村の人が訪ねてきて、代銀を払って後日引き取りにくると約束して帰った。ところが、一月经っても誰も引き取りにこないで、小枕村から泉村に催促に行くと、誰も心当たりがない話だった。しかし、代銀は払ってあるので泉村総出で引き取りにいき、無事竜泉寺の再建ができた。村では裏山に住む狐の恩返しだろうと語り伝えてきたという。



古坂峠

この話はいい話だが、やはり人を化かす話も伝わっている。篠山盆地の南、後川（しつかわ）という谷を經由して摂津国能勢郡（せつつのくにのせぐん = 現在の大阪府能勢町）へ抜ける道に、古坂峠（ふるさかとうげ）がある。あるとき後川の人が篠山の祭りからの帰り道、おみやげのご馳走を二人で担いで家路を急いでいると、一方の男の妻が向こうからやってきて、代わりにご馳走を持ってあげようと言う。これはあやしいと思った男は持っていた小刀で女の胸を刺して追い払った。家に帰ってみると果たして妻は無事だったが、ちょうど夫に胸を刺された夢を見て目が覚めたところだったと話した。夜が明けて峠の現場へ行ってみると、大きな狐が胸を刺されて死んでいた、という話である。

ここまでで紹介した話は、現代の民話集に載せられている話で、人を化かすが命まではとらないものが多い。しかし、江戸時代の書物に出てくる狐にはもっと恐ろしいものがある。紀行文「近世西播磨の怪談」でも紹介している『西播怪談実記（せいばんかいだんじつき）』に見える、宍粟郡山崎（しそうぐんやまさき = 現在の宍粟市山崎町）の話を紹介しておこう。

山崎の市街地から見て揖保川（いぼがわ）の対岸、出石（いだいし）というところには、江戸時代、周辺の幕府直轄領を治める山方役所（やまがたやくしょ）があった。出石の川原は、瀬戸内海へと通じる揖保川水運の起点ともなっていた。

正徳年間（1711～16）のこと、出石の米蔵で狐が子を生んだが、近くの子供が一匹取りあげて遊んでいるうちに死んでしまった。4、5日後、その子供と母親が出かけて帰ってこないのを捜索すると、子供は揖保川に沈んでいて、母親は少し離れた比地村（ひじむら）の七里が岡で、葛に巻きつかれ、大きな松の枝につるされて死んでいた。



山崎出石 幕領山方役所跡



揖保川の出石川原

話を聞いた山方役所の責任者は怒り、領内の狐狩りを命じた。その夜、役所の蔵奉行は、庭にやってきた2匹の狐に、「おまえたちはどこかへ立ち去るように」と諭したので、狐は1匹も捕らえられなかったという。

この話では、子供のかたきを討つために、実際に人の命を奪ったことになっている。どの伝説でも似た傾向があるが、狐も江戸時代の話では、人間にとって恐ろしい存在として描かれる場合が多い。

用語解説

【佐渡島の団三郎狸】さどがしまのだんざぶろうだぬき

佐渡島の狸の大将とされる。夜道を歩く人を壁を作り出しておどかさず、屋敷で化かす、木の葉を化かした銭で買い物をする、などの話が伝わっている。また、芝右衛門狸とよく似た狐との化けくらべ話もある。加賀国で狐と化けくらべをすることになり、団三郎が大名行列に、狐が奥女中に化けて殿様に声をかける、とのことになった。やがて大名行列がやってくると、狐は女中となって殿様の籠に声をかけようとしたが、実は本物の大名行列で狐は斬られそうになり、あわてて逃げていった、という。

なお、佐渡では狸を貉（むじな）と呼ぶので、団三郎貉と呼ぶのが一般的である。

【讃岐屋島の禿狸】さぬきやしまのはげだぬき

香川県高松市屋島にある屋島寺の守護神で、四国の狸の総大将とされる。源平の屋島合戦での様子を幻術で再現するなどしたという。後に獵師に撃たれて死んでしまうが、その霊が阿波に移り住んだともされている。

【安宅氏】あたぎし（あたかし）

紀伊国安宅荘（きののくにあたぎのしょう = 現在の和歌山県白浜町）を本貫地とする武士。南北朝時代から水軍としての活躍が知られ、やがて淡路にも勢力を広げた。由良城（ゆらじょう）や洲本城を拠点としたとされ、戦国時代には三好（みよし）氏に従うようになった。

【脇坂安治】わきざかやすはる

1554 - 1626。近江国脇坂（おうみのくにわきざか = 現在の滋賀県湖北町）出身の武士。羽柴秀吉（はしばひでよし）に仕え、天正11（1583）年の賤ヶ岳の合戦（しずがたけのかっせん）で活躍、賤ヶ岳の七本槍（しちほんやり）の一人に数えられる。天正13（1585）年淡路洲本3万石の領主となる。慶長5（1600）年の関ヶ原の合戦では、はじめ西軍に属したが、小早川秀秋らとともに東軍に寝返った。慶長14（1609）年伊予国大洲（いよのくにおおず = 現在の愛媛県大洲市）5万3千石余に転封。寛永3（1626）年京都で没。子孫は後に播磨龍野（たつの = 現在のたつの市）藩主となる。

【蜂須賀氏】はちすかし

尾張国蜂須賀（おわりのくにはちすか = 現在の愛知県美和町）から出た領主。織田信長、豊臣秀吉に仕え、天正13（1585）年に阿波国（あわのくに = 現在の徳島県）一国を与えられる。ついで大坂の陣（1615年）の後、淡路一国を加増され、25万石余となる。その後代々徳島藩主として幕末に至る。

【『絵本百物語』】えほんひゃくものがたり

天保12（1841）年刊。別名『桃山人夜話（とうさんじんやわ）』。文章は桃花園三千磨が執筆、画は竹原春泉（たけはらしゅんせん）が描き、45種の妖怪話を多色刷りの絵とともに紹介している。

用語解説

【『播磨府中めぐり』】はりまふちゅうめぐり

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻18収録。芦屋道海（あしやどうかい）著。末尾に天正4（1576）年4月7日とあり、このころの成立と見られる。播磨府中（姫路）周辺の城跡、社寺、名所などを詳細に記し、池田輝政（いけだてるまさ）による現姫路城築城以前の姫路を知るうえで重要な史料である。ただし、後世の補筆も多く見られる。著者の芦屋道海は、英賀（あが＝現在の姫路市飾磨区英賀宮町付近）の住人で、平安時代の陰陽師芦屋道満の子孫を称したという。『播陽万宝智恵袋』には、この他に、『近村めぐり一歩記』、『播州巡行（考）聞書』も道海の著書として収録されている。また、『播磨鑑（はりまかがみ）』にも道海の和歌が見える。

【『播州府中めぐり拾遺』】ばんしゅうふちゅうめぐりしゅうい

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻18収録。寛延3（1750）年、三木通識著。同書に収められた芦屋道海（あしやどうかい）著『播磨府中めぐり』の注釈書としての性格を持ち、姫路周辺の寺社、古跡などについての考証を加えた書物。三木通識は18世紀前半から中ごろにかけて活動した姫路の文人。幼少より学を好み、多くの著作を残した。『播陽万宝智恵袋』にも、通識の著作は17点収められている。

【『播州故事考』】ばんしゅうこじこう

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻14収録。天正4（1576）年赤松寿斎（あかまつじゅさい）の著。播磨の寺社やさまざまな故事を記したもの。著者の赤松寿斎については詳しいことはわからないが、『播陽万宝智恵袋』巻44の『播州諸家注進』も、寿斎の著と記されている。

【『播州雄徳山八幡宮縁起』】ばんしゅうゆうとくさんはちまんぐうえんぎ

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻17収録。寛延3（1750）年三木通識著。現姫路市山野井町（ひめじしやまのいちょう）にある男山（おとこやま）とその周辺にある寺社の、由来、変遷、伝説などを記したものの。著者の三木通識については、本用語解説の『播州府中めぐり拾遺（ばんしゅうふちゅうめぐりしゅうい）』項目を参照されたい。

【『近村めぐり一歩記』】きんそんめぐりいっぼき

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻18収録。芦屋道海（あしやどうかい）著。本文中に、天正3（1575）年3月7日に著者が居住していた英賀（あが＝現在の姫路市飾磨区英賀宮町付近）のあたりを一巡して書いたもので、同4年3月30日にもう一度歩いて補訂した、とされている。英賀を中心に、西は姫路市網干区和久（ひめじしあばしくわく）付近、北は太子町の鶯（いかるが）あたり、東は現在の姫路駅付近から飾磨港（しかまこう）あたりまでが記録され、社寺、名所、伝説などが記されている。中世最末期の姫路周辺を示す、数少ない史料の一つである。著者の芦屋道海については、本用語解説の『播磨府中めぐり』項目を参照されたい。

用語解説

【『播陽うつつ物語』】ばんよううつつものがたり

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻39収録。奥書によると、天正元（1573）年12月10日の夜、赤松了益（あかまつりょうえき）が久保玄静（くぼげんせい）に話した内容をまとめたもので、剣持清詮（けんもちきよあき）が所蔵していた本を三木通識が元禄年間に転写し、延享5（1748）年に校訂したものとされる。播磨の古跡の由来や物語が、別の本からの引用を含めて記されている。著者の赤松了益は、龍野赤松氏の一族で、戦国末期から安土桃山時代にかけて龍野で医業を営む傍ら著述を行った人物とされ、『播陽万宝智恵袋』にも他に3点の著書が収録されている。

参考書籍

伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
日本伝説 播磨の巻	1918 (1978復刻)	編著：藤沢衛彦	日本伝説叢書刊行会
兵庫の民話(日本の民話 25)	1960	編集：宮崎修二郎、徳山静子	未来社
郷土の民話 淡路編	1972	編集："郷土の民話"淡路地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
郷土の民話 中播編	1973	編集："郷土の民話"中播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
兵庫のむかし話	1978	編著：兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
兵庫の伝説 1	1981	編集：有井基、絵：のざきジョー	神文書院
兵庫のむかし話 釈講	1983	著：船知慧、さしえ：森崎伯霊	中央出版エージェンツ
あわじの昔ばなし	1985	編集：濱岡きみ子	神戸新聞出版センター
兵庫の伝説 2	1986	編集：有井基、絵：のざきジョー	神文書院
洲本八だぬきものがたり	2002	文：木戸内福美、絵：長野ヒデ子	アリス館

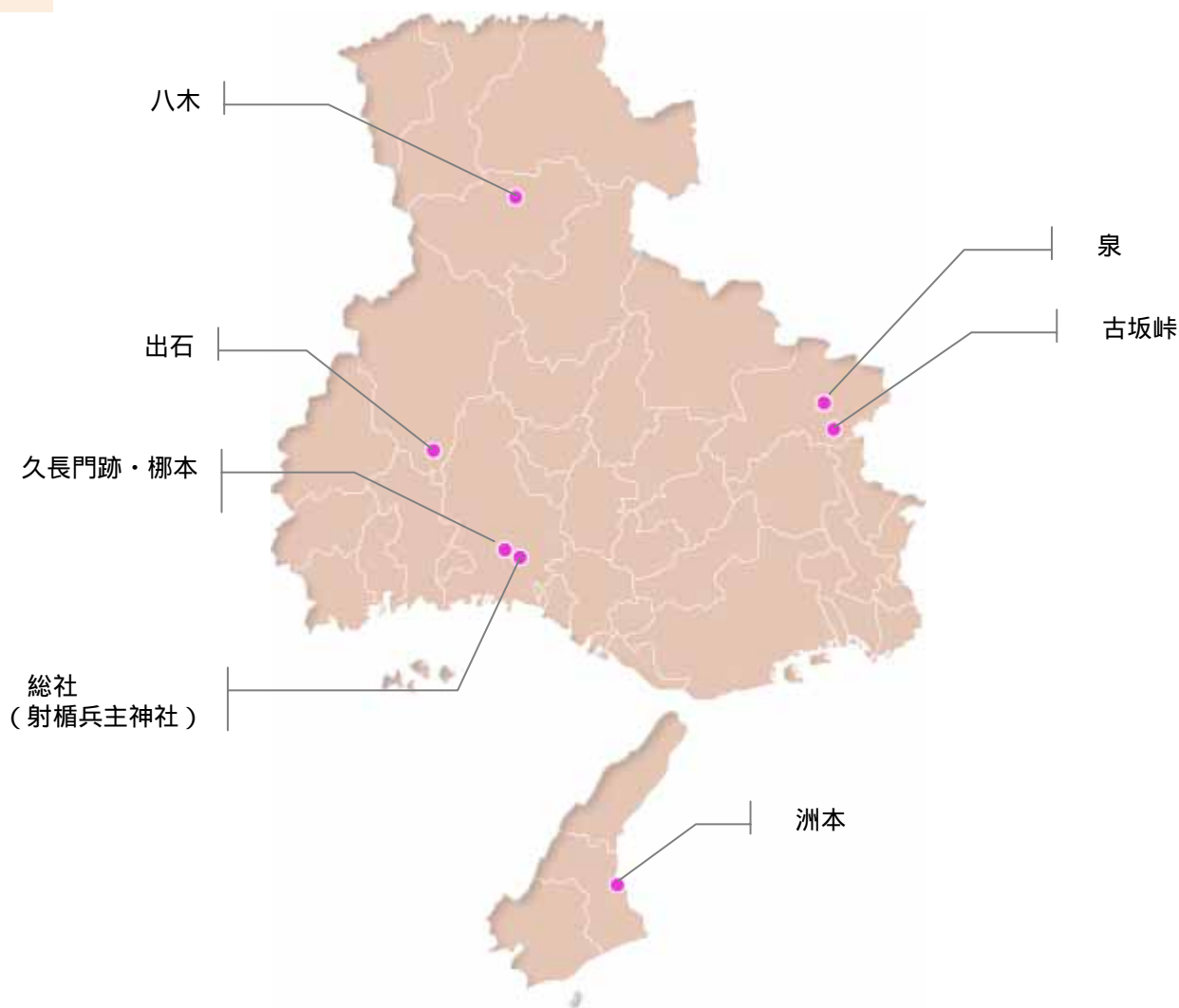
歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
総社集日記(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州古所伝聞志(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州故事考(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
国衙巡行考証(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州雄徳山八幡宮縁起(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播磨府中めぐり(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州府中めぐり拾遺(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
近村めぐり一步記(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播陽うつつ物語(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州続古処拾考(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播磨鑑	1958	著者:平野庸修、校訂:播磨史籍刊行会	播磨史籍刊行会
播州名所巡覧図絵	1974	著者:秦石田、校訂:井口洋	柳原書店
桃山人夜話 絵本百物語 (角川文庫ソフィア)	2006	竹原春泉	角川書店
阿波における狸伝説 附外道について (収録:山田野理夫編『憑物』)	1988 (初出 1922)	著者:後藤捷一、編集:喜田貞吉	宝文館出版
郷土の民話 丹有編	1972	編集:"郷土の民話"丹有地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
郷土の民話 但馬編	1972	編集:"郷土の民話"但馬地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
日本物語通観 16 兵庫	1978	責任編集:稲田浩二、小沢俊夫	同朋舎
日本の伝説 43 兵庫の伝説	1980	宮崎修二郎、足立巻一	角川書店
狸とその世界(朝日選書400)	1990	中村禎里	朝日新聞社
しばえもん	2000	作:野口早苗、絵:山口久仁子	淡國書房(成錦堂出版部)
狐の日本史 古代・中世編	2001	中村禎里	日本エディタースクール出版部
狐の日本史 近世・近代編	2003	中村禎里	日本エディタースクール出版部
丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし 8	2008	編集:「丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし」編集委員会	(財)丹波の森協会

その他の参考資料

書籍名	刊行年	著者名	発行者
洲本八狸 虎の巻(洲本バスセンター内観光案内所配布パンフレット)	不詳	編集:洲本市街地活性化センター 八狸委員会	洲本市街地活性化センター 八狸委員会

所在地リスト



古坂峠	篠山市曾地中、後川上
泉	篠山市泉
八木	養父市八鹿町八木
出石	山崎町須賀沢
総社（射楯兵主神社）	姫路市総社本町190
久長門跡・榎本	姫路市本町
洲本	洲本市山手、本町、ほか

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日